

【助成 38 -53】

衰退都市のコンバージョン——都市縮小時代における都市再開発政策の日米比較

研究者 法政大学社会学部 教授 堀川 三郎

〔研究の概要〕

本研究は、「都市が衰退しはじめた時、一体、どのようにして都市を再活性化させるのか」について探究することを目的としている。そのために、北海道小樽市における小樽運河保存問題と、アメリカ・セントルイス市における旧郵便局舎およびセンチュリー・ビル保存問題を取り上げた。小樽市運河港湾地区で筆者が実施した景観定点観測調査データの分析によると、小樽は歴史的景観を売りにしていながら、それが急速に減少してきているということが明らかになった。セントルイス事例については、コロナ禍のために現地調査が実施できず、資料解読に止まったものの、1960年代から2000年代にかけての社会的対立構造の一端がみえてきた。

〔本研究の問いと目的〕

「都市が衰退しはじめた時、一体、どのようにして都市を再活性化させるのか」「変化をいかにコントロールするのか」——本研究はこうした一連の問いに答えるための日米比較研究であり、都市縮小時代の都市政策を考えるための、基礎的な社会学的研究である。転換期にある日本の都市問題・都市政策をアメリカと比較し、より深い理解を得ることを目指している。

本研究では、北海道小樽市とアメリカはミズーリ州セントルイス市での景観保存問題を取り上げる。前者の小樽の事例は、衰退から観光都市にコンバージョンして蘇った優等生といわれる事例である。もう一方のセントルイスの事例はアメリカの都市再開発史上、そのコンバージョンをめぐる二度も全米の注目するところとなった事例であるが、管見のかぎり、ほとんど研究がなされていない。本研究はその空白を埋め、日本の都市再開発政策および景観保存政策への示唆を得ようとするものである。筆者が小樽で行ってきた研究手法を援用し、米国の保存運動に対する質的インタビュー調査を実施することによって、地域住

民にとっての歴史的環境の意味付けと、保存／再開発政策の策定過程を浮き彫りにする。都市社会学と環境社会学をコアに、建築学と歴史学の知見を重ねて分析するところに方法的独自性がある。

〔研究経過および成果〕

先ず、北海道小樽市の港湾地区再開発政策とまちづくりについて、「小樽運河保存運動」参加者への系統的なインタビュー調査を行うことによって、当時の事実関係、運動の展開、それに対する小樽市行政の対応、さらには政策の質的変容を、一定程度、明らかにすることができた。得られた重要な知見のひとつは、市行政の施策とその変容過程は、法などの制度の記述だけでは説明し切れない、ということであった。小樽運河を埋め立てて道路を建設するという再開発事業は、都市計画関連諸法や市の規則、内規にしたがって執行されていたにも関わらず、10年近く、市が保存運動と論争を継続していたことは、首長の政治的信念の形成まで遡って考察する必要があることを示していた。

さらに、筆者が 1997 年から実施している景観定点観測調査のデータ分析によれば、小樽が 900 万人を超える観光入り込み数を誇っていた 1990 年代から 2020 年代にかけて、運河沿いの景観が大きな変化を遂げてきたことが明らかになった。このデータの語るころは、小樽は運河とその周辺の石造倉庫群といった歴史的景観を売りにしていながら、それが急速に減少してきているということだ。「運河論争」で厳しい対立と分裂という、地域コミュニティにとって高いコストを払ってもたらされた観光都市・小樽は、皮肉なことに、自らが守ろうと闘ってきた景観自体を失っていることが明らかになってきた。こうした成果は、1 冊の英文書籍 (Horikawa, 2021b), 3 本の論文 (堀川, 2021a; Horikawa, 2021c; 堀川, 2021d) という形で刊行することができた。

次にセントルイス事例の研究に関しては、先にも述べたように、主に文書解読を行った。そこで見えてきたのは、このセントルイス中心市街地の再開発問題は、2 回、大きな社会的対立を顕在化させたということである。1960-70 年代の 1 度目の「旧郵便局舎」保存問題については、地元のセントルイス景観協会 (Landmarks Association of St. Louis, Inc.) およびミズーリ州立歴史協会 (State Historical Society of Missouri) の議事録やアーカイヴスを複写して解読を進めてきている。こうした文書資料や当時の新聞切り抜きの収集による年表作成を進めつつある。暫定的ではあるものの、見えてきたのは、地元セントルイスの保存運動と全米レベルの運動との緊密な協力関係である。

2 度目の保存問題(「センチュリー・ビル」)に関わった当事者達への系統だったインタビューは、コロナウイルス禍で行うことができないでいる。そのため、当面

は行政側の文書資料によって、事態の推移を跡付けていく他はない。また、開発を進めた側のナショナルトラスト関係者、セントルイス市の行政官僚、ミズーリ州および首都ワシントンにある連邦一般調達局 (General Services Administration) 関係者から入手した文書資料の解読を進めているが、研究成果の公刊にまでは至っていない。ある程度見えてきたのは、第 1 回目の対立とは対照的に、地元セントルイスの保存運動と全米レベルの運動との深刻な対立関係であった。コロナ禍の終息を待って現地に飛び、鋭意、調査を進めたいと考えている。

[発表論文]

1. 堀川三郎 [2021a] 「観光のパラドクスと地域コミュニティ: 小樽の観光まちづくりの教訓」『世界』(岩波書店) 第 940 号 (2021 年 1 月号), pp.115-126.
2. Horikawa, Saburo [2021b] *Why Place Matters: A Sociological Study of the Historic Preservation Movement in Otaru, Japan, 1965-2017*. Cham, Switzerland: Springer.
3. Horikawa, Saburo [2021c] “Do as Democracy Demands: The Irony of Historic Preservation Movement and Its Relevance in Popular Sovereignty in Postwar Japan,” in Helen Hardacre, Timothy George, Keigo Komamura and Franziska Seraphim, eds., *Japanese Constitutional Revisionism and Civic Activism*, pp.279-289, Lanham, MD: Lexington Books.
4. 堀川三郎 [2021d] 「歴史的環境保存と記憶: 集合的記憶はどこに位置づくのか」『日仏社会学会年報』第 32 号, pp.39-55.